

書道史における『木簡』の位置 ～その現代的開放性について～

平嶋 一臣

Position of “MOKKAN” in Calligraphy History

～ About the modern openness～

by

Kazuomi HIRASHIMA

キーワード：木簡 原初的 現代的 開放性

はじめに

木簡⁽¹⁾と呼ばれる書道史上最古の筆跡が残っている。その多くは、漢の時代に書かれたものである⁽²⁾。これを、「最古の筆跡」と、私があえて「書道史上の古典」と呼ばないのは、この筆跡が「書の道」を求めることを目的とした人の手になるものではないからである。木簡を書き遺した人々は、我々が今日考えているような「書家」「書道家」ではなく、一介の名もない書記官にすぎない⁽³⁾。

しかし、それゆえにこの木簡に見られるさまざまな文字や書体は、筆で字を書くことを生業とするようになった、後の書家・書道家の作とは、趣を異にした魅力を持っている。では、その証として未だ一部ではあるが、現代書家の心を捉えて離さない、木簡中に見る文字群が、書家を惹きつけているこの魅力の原点はどこにあるのだろうか。

本論ではそこを熱心に研究・臨書している方々もいることを中心に論じていく。そのことで、戦後百花繚乱のごとく乱立しては、およそ書家らしくない小競り合いが続いている書道界に、「書」本来の持っている人間的な美的価値を取り戻す絶好の教材と考えるからである。さらには、この研究を行うことで、木簡の運筆法を再評価しつつ、その長所を、現代書の創作あるいは書教育の中に生かしたいと考えるからである。

1 序論

私と木簡との出会いは今を遡る52年前、『木簡集英』と書かれた和綴じ本を手にしたことに始まる。当時高校2年生の私は、師の手本を真似ることを「書」の勉強と考えていたが、この『集英』をめくっていくにつれ、木簡への思いはつのっていった。それは天衣無縫の筆使いが随所に現れており、今日で言う書の基本に満ち満ちていたことが大きかった。実はその数年後には「空海」の書にも興味を持ち始め、「木簡」の魅力と並行して古典を学

受理日：平成28年10月31日

純真短期大学こども学科 特任教授

び続けていくことになる。

初めての木簡との出会いから8年後、時にマンネリ化し始めた自分の臨書方法に行き詰まりを感じるがあった。そこでふと木簡の実物を見たいと思った。実物を見ることで、何か新たな気付きがあるのでは・・・と考えた。「木簡」とは、一体どのような状態で遺っているのだろうか。板切れの様子、墨の濃さ、筆の走り、それまで和綴じの本に写真印刷されたものばかりを見て臨書してきただけに、実物を見たい気持ちは日々つのつていった。

調べてみると、当時木簡の実物を展示しているのは、大英博物館だけ⁽⁴⁾であった。幸いにして当時南米に滞在していた私は、思いきってロンドンまで飛んだ。木簡の臨書を始めて14年目の1978年8月、念願適い木簡の実物と対面することができた⁽⁵⁾。

大英博物館の薄暗い一室の片隅に、ひっそりと置かれたガラスケースに、木簡は展示されていた。予想していたよりはるかに小さなもので、細く黒ずんだ11本の板切れに、隸書体の文字が行儀良く並んでいた。



大英博物館正面



漢時代・木簡



甲骨文字

期待が大きかっただけに気が削がれた実物木簡との対面であった。それでも、はるばるここまで来たのだからと、食い入るように目を近づけ判読を試みた。しかし、展示されている11枚の板に書かれている文字は小さすぎた。薄暗い部屋の片隅に置かれていることも、判読を妨げた。

私にとって大英博物館一のお目当て品は、かつて英国の探険隊が発掘した時の興奮もなくなったようで、今では忘れられつつあるようだ。幸いしたのは、この世紀の発見と言われたシルクロードの至宝の撮影は自由ということだった。また、その前に立ち止まる者も無く東洋のシルクロードに遺された筆跡を、しばしの間私が独占することができた。その薄暗い展示室でカメラの露出などを計算し、木簡の隣に並んでいる甲骨文字とともにゆっくりと写真に収めることができた⁽⁶⁾。

この対面から38年、その間も「空海」と「木簡」両輪の勉強が続いてきた。空海の卓越した筆法と木簡のあまりにも技巧の乏しい（無い）素朴さという、相反した書線の魅力が、今も私の何かを・どこかを惹きつけて放さないでいる。

本論では、その筆法としては稚拙と言われる「木簡」に焦点を当て、そこに潜む書線の魅力を探りつつ、書の原初的なスタイルの中から、現代人が忘れてはならないその書画的価値を論じていく。

(1) 研究の目的

本研究の目的を次の四項とする。

①木簡の書的価値

木簡が生まれたのは、毛筆体が生まれた直後であるだけに、木簡の文字群を分類することで、書体の変遷を確かめることができる。また、木簡に見られる書は、素人（今日の書家・書道家ではないという意）が書いたというだけで、書道史的にはこれまであまり重要視されていない。加えて、ここに書かれている文面が荷札や記録文あるいは連絡文書が中心であり、文章としての価値が無いからなのか、その書的価値までも低く見られる傾向がありはしないか。木簡中に見られる漢字は、筆の発明と期をほぼ同一にしているだけに、当時の方が、筆をどのように使おうとしていたのか、原初的な筆の理を探る。

②木簡に潜むエネルギー

筆で文字を書き始めた頃の運筆法はどのようなものであったろう。そのことを、追体験（臨書）することで、書道史の原初的なスタイルを探りつつ古代人の書線に込めるエネルギーに迫る。

③現代の書写教育の在り方および木簡の現代的開放性

この最も古い毛筆体は、はたして「書」作品として、稚拙な筆使いによる過去のものと考えてだけでよいのであろうか。この原初的なスタイルの中にこそ、現代的かつ開放性を重んじる現代書に通じるものがある。

時にして小学生の書いた毛筆書の中に、この木簡的な筆運びと近似的なものを見ることがあるが、これもまた筆の発明期になる木簡の飾り気のない素朴な書線と、子どもの書線との共通点と考えられないだろうか。仮にそうであれば、木簡臨書による学びをそのまま現代書の中に生かすこともできると考えた。また、小学校における初期毛筆授業の在り方もここで考える。

④木簡を臨書する場合の立ち位置（二つの臨書態度を例に）

木簡の臨書を重要視している日本の書壇・書人団・書サークルは、さほど多いわけではなく、現代の書学者にとってはややマイナーな存在である。したがって、木簡について紹介したテキストが出版されはじめてはきたが、未だに日の目を見ることが少ない。そんな中、一部のグループ（書家）ではあるが、木簡の書道史上での価値を強く説く書家・研究者の開拓者もなくは無い。

とは言え、これらの書家の中にも木簡へのアプローチの方法は同じとは限らない。そのことを、臨書態度の違いから大きく二つの流れを指摘したい。

以上、4つの視点から木簡の分析を行い、一見見過ごされがちな漢時代の一地方書記官が遺した「木簡」が、今再び現代人に書の本質を教えてくれるモデルとなり得ることを論じる。

2 本論

(1) 木簡の書的価値

①文字（漢字書体）の変遷を知る

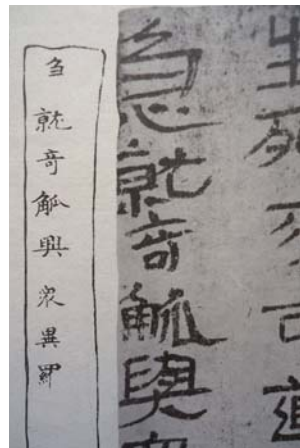
漢字の書体変遷を知る上で、木簡は書道史上貴重な資料である。

我々は、ややもすると書体の成り立ちを、篆書→隸書→楷書→行書→草書という順序で、歴史とともに移り変わってきたと理解しがちである。篆書⁽⁷⁾から隸書⁽⁸⁾への変遷まで、およそ1000年と考えられるが、そのことが他の書体の成立期の間隔もまた、同一のように考えてしまっているのであろう。しかし、はたしてそうであろうか。

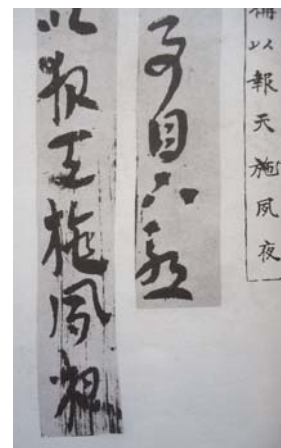
我々は、ここにおいてかなり漠然とした印象で、書体の変遷を眺めてきているにすぎない。つまり、『篆書をよりすっきりと見せ、書きやすく直線的な線で構成することから隸書が生まれ、その隸書から波磔^{はたぐ}を無くし、より簡略化と直線化を試みた結果楷書が生まれた。次に、その楷書を早書きする必要があるために行書が生まれ、さらに早書きを必要としたために草書が誕生した』と、このように考えがちである。しかし、これはあくまでも現代人の尺度で眺めているからであり、この固定観念は「木簡」を詳細に観察することで間違っていることに気付く。次の3枚の写真が、そのことを証明している。



木簡の中の隸書体



木簡の中の楷書体



木簡の中の草書体

いずれも、漢時代の木簡である。このことから、すでに漢の時代に草書・行書・楷書が並立して存在していたことが分かる。

②「書」は名筆家と呼ばれる人の遺したものだけが評価されて良いのか

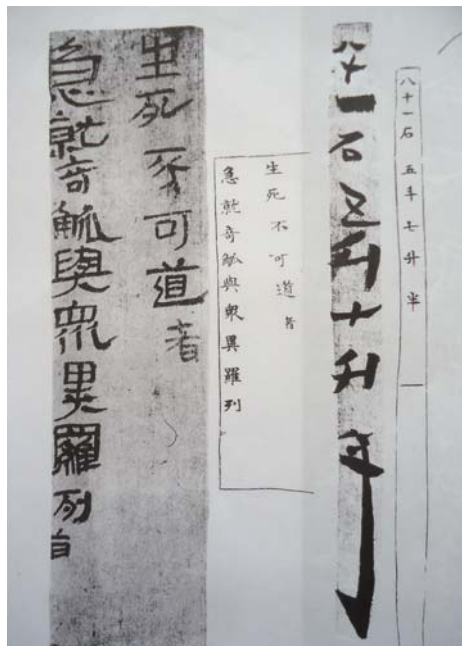
先にも述べたとおり、木簡を書き遺した人々は、当代一流の書家というわけではない。その文面から想像しても、一介の書記官または記録係といった人達であろう。したがって、その用筆法も晋や唐時代に現れてくる書の専門家（いわゆる書家）のように、筆運びや造形美に配慮するなどの意識は少ない。その代わりに外に向かうような「開放性」に富んでいる。

この点からも木簡は価値がある。つまり、書美は木簡の中に十分に存在するのだ。そこで、実験的に本学書道部学生11名を対象に、書道史上の古典名筆と言われる『九成宮禮泉銘』と木簡2枚の写真版を比較させた。学生の反応を掴みたいと考えたからである。

アンケートを取る際、提示した古典・三点についての私の紹介は次のとおりである。

AとBは、「木簡（もっかん）」と呼ばれるもので、主に漢時代、竹や木の札に毛筆で書かれたものです。毛筆で書かれたものとしては、歴史上最も古いとされています。これらは、中央アジア・シルクロードの発掘で発見された貴重な歴史的遺産でもあります。

Cは、「木簡」の時代からおよそ600年が過ぎた中国・唐時代に書かれた書で、当時の著名な書家書いたものです。



A 木簡（漢時代） B



C 九成宮醴泉銘・歐陽洵書（唐時代）

学生たちのアンケート結果は次のとおりである。

- Bを書いた人は、**力強く豪快な人**だと思います。最初は慎重ですが、最後の方になるにつれて、木の板の余りを考え、少しずつ間を広げているところからそう考えました。それに比べると、Aを書いた人は、**丁寧な几帳面なタイプの人**ではないでしょうか。それは、木目に沿うようにゆっくりと筆を運んでいるからです。Cを書いた人は、多分中国のえらい学者だと思います。また、この字は生徒に文字を教えるための手本だと思います。この人は気むずかしくて冷めた感じの先生で生徒に厳しい人だと思います。
- Bを書いた人は、**感受性が豊かで独創的・ユニークな人**ではないでしょうか。それに比べて、Cを書いた人は厳格な人のように思います。きちんと漢字を並べようとしているからです。
- Bの人は、最後の文字からして**かなり豪快な人**を想像します。また、このように木の札に墨で書くことを何度も経験している**手慣れた人**だと感じます。Aは、文字の大きさが揃っているところから、**几帳面な人**を想像します。Cは、字は綺麗

なのですが、Bさんのような力強さがあまり感じられません。

- Bを書いた人は、線が太く最後の字の延びているところから、**大胆で大らかな人**のように感じました。Aを書いた人は、最後の画の「はらい」が跳ね上がる特徴があり、どちらかという**とマイペースで明朗な人**を想像しました。
 - Bは、この村で唯一字が書くことができた人だと思う。そのこともあり**自由に楽しんで書いている**様子が伝わります。Aは、父に初めて漢字を教えてもらった**思春期の女の子**が書いたのではないのでしょうか。Cの字の綺麗さは、女性が書いているようです。とても几帳面な人みたいな気がします。
 - Bを書いた人は、男性三十歳位。**あまり字は書き慣れていない**。しかし、「半」の字には**強い印象**を受ける。この**文章全体に、強い思い入れがある**ように感じる。Aを書いた人は、**二十歳代後半のまだ若い女性**。字の大きさも同じで**几帳面な性格**をしている。Cを書いた人は、五十歳の女性で「書く」ことを仕事にしている方。それぞれの文字（漢字）の大きさが等しく、字も綺麗だし大きさも均一、字の間の幅もほぼ均一で、何事もきちんとなしないと気が済まない性格の人。
 - Bの人は**強い人だけど大雑把な人**のようです。Aの人も**あまり細かいところまで気にする人ではない**。ABどちらも男性と 생각합니다。それに比べるとCの人は、丁寧で細かいことにも気付く人です。優しい男性と 생각합니다。
 - Bの文字を書いた人は、所々筆圧が違うところがあります。また、最後の「半」の字の縦棒の長いのは、「やっと書き終わった！」という**達成感や安堵感**からそうなったのだと想像します。Aの文字を書いた人は、字の綺麗さから**ある程度知識のある方**だと思います。しかし、書き始めの文字がすごく大きいのは、**計画性がない**のかもしれませんが。Cは、文字の大きさも整っており、しっかりと書いて習字みたいです。「止め」や「はね」「はらい」も上手く進化していると思いました。
 - Bの最後の文字の「J」を長く強く書いて跳ね上げているのは、**少しかっこ付けて自慢している**のかも。それとも**書いている内に楽しくなっていた**からかもしれません。筆で字を書ける人が少ない時代なので、この人は**得意気**に書いている。Aを書いた人は、女性だと思います。丸っこくて揃っている字だからです。**優しい中に力強さも感じられる**からです。Cの人は、どれだけ綺麗に書けるかを争っている。文字を書ける人がほとんどの時代になったので、今度はどれだけ綺麗に書けるかが重要になったのではないか。ちょっとお金持ちで位の高い人。
 - Bは二十歳代の男性が書いたと思う。この人は**がさつで荒っぽく激しい性格であるが、実は仲間思いの優しい人で、自分を外に向かって上手に表すことができず不器用な青年**。Aの人は、筆をゆっくりとうごかして書けるようなゆとりがあって書いている。Cは四十歳代の男性が書いた。一つ一つの文字を丁寧に書いているところから、誠実で几帳面だが気難しい性格の人ではないか。家庭も仕事も上手くいっているがどこか寂しい感じがする人。
 - BもAも小学生が**初めて漢字を書いた**みたいな雰囲気です。それに比べCはすっかり大人になった人が練習を重ねてここまで上達した人みたいです。
- これら、学生へのアンケートからは、さまざまなことが読み取れる。学生の中には、筆者の線質から想像をかなり膨らませ、作者の気質などをも想像している者もいる。

つまり「書は人なり」という書本来の芸術的価値の基本に迫っている。今、学生がその価値を評している「木簡」部分を**ゴシック体**にした。これを見ても分かるように、後の時代に職能的に現れてくる書家の手になるものでない木簡にも、何らかの書的価値（人間性や美的感性）の存在に気付かされる。

木簡は、漢字体の変遷や、当時の物流など考古学的な資料としての価値は重要視されてきたが、書道史的には、これまで臨書など書学の対象にされることは少ないまま今日に至っている。それは木簡が著名な書家の手によるものではなかったことにも起因するのであろう。しかし、はたしてそのような基準だけで、書の美的価値を判断してよいものだろうか。

「書は人なり」「書線には、その折々の筆者のこころの綾や襞が顕れる」「書は自称書道家と言う方々のみに通用する芸術なのか」と日々煩悶する私にとって、木簡の筆跡に潜んでいる書的価値が、あまりに低く見られているのが残念である。ここに見られる明るく無邪気で弾力のある書線こそ、現代の書家が忘れかけた書の原初的な美しさを秘めていると考えるからだ。

シルクロードを中心に、木簡の発掘が進んで行く中、そこに書かれている文字群は、漢時代という筆の発明期の先人が、素朴ながらも、何とかこれを生かし使いきろうと、筆の理を生かすことを思考した知恵の結晶ともいえる。今回の学生の気付きにも見られるように、当時の書き手の純粹素朴な筆致は、後世（特に唐時代以降）百花繚乱のごとく輩出されていく書道家の遺した古典の名跡に決して劣るものではない。

（２）木簡に潜む奔放なエネルギー

「力強い」「豪快」「独創的」「大胆」「大らか」「楽しんでいる」「強い」「達成感」「安堵感」「荒っぽい」「激しい」「自由」との木簡評は、そのまま文字群に潜む書き手の背景を物語っている。

これらの言葉に共通するのは、木簡を通して、個性あふれる当時の書き手の持つある種のエネルギーの感じ取りにある。このことは、現代において木簡の書的な価値を見出し勉強の一助としている書家の学びに、その共通性が見られる。彼らは、木簡に潜む書的価値を十分に理解している。このことは、かつて画家・岡本太郎が縄文土器の中に人間が本来的に持っている爆発的なエネルギーを感じ、その後の現代絵画の方向性を自ら切り開いていったことにも共通している。彼が木簡の存在を知っていたならば、はたしてどんな反応を示したであろうか。想像しただけでも楽しくなってくる。

ここで、私なりに木簡から人間的パワーを感じる部分を選び抜き、その部分の臨書を試みる。この追体験を通し、書道史上の極めて原初的なスタイルの中に、古代人のエネルギーを掴んでみたい（いずれも左が原典、右が私の臨書）。



(3) 現代の書写教育の在り方および木簡の現代的開放性

私は、かつて小学校における「書写指導の現状」を知りたいと、福岡市内 16 校の小学校の 3 年生から 6 年生までの児童 2756 名を対象に、アンケート調査を行った⁽⁹⁾。その結果、小学校高学年に至るにつれて書写離れ・書写嫌いが増加していることが分かった。その理由の主なものとして、

- ①習字道具の準備や片付けなどの煩雑さ
- ②文字を書く上での制約の多さ

の 2 点が多数を占めた⁽¹⁰⁾。

その「制約」の中身は、何よりも難解な筆使い・筆運びということであった。なかなかうまくいかず（褒められず）、したがって学年が進むにつれて、書写への興味は薄れていることを知った。このことを考えると、先に示した本学の一学生の指摘する「(木簡は)小学生が初めて漢字を書いたみたい」をどう解釈すれば良いのだろう。筆を初めて手にしたと言う点では、古代人も小学校 3 年生もまさに同じスタートラインにある。したがって、当然のように両者間に相似的な線質の文字が表れてもおかしくない。

入学してからの 2 年間、硬筆のみを学んできた 3 年生に、4 月（実際には 5 月に毛筆授業をスタートするケースが多かった）にいきなり筆の傾き具合・起筆の打ち込みの角度・運筆中の反りとうねり・終筆の押さえ・点折の止め・撥ね・払いと目白押しに記憶学習を強いるのは過酷すぎる。児童期の「書」の指導（小学校では「書写」）は、いきなり「起筆」「運筆」「終筆」といった型や形からはいるのではなく、まず筆線の多様さ、筆圧による書線の変化や毛筆独特の妙味を十分に学ばせるべきである。そこまでに興味関心が高まった後、次のステップである点画や文字の整え方を学ばせたい。

次に示したのは、筆を持った経験がない 1 年生と、毛筆書写を学びはじめたばかりの 3 年生と、毛筆書写学習 3 年目になる 5 年生の作である。低学年ではどこか木簡のあち

こちらに見られる線質と共通する部分が見られる。小学校での毛筆書写スタート時の学習では、これも可とし、教師はゆったりと大らかな目で見つめ励ましてほしい。子どもたちが楽しみながら元気あふれ健康的な書を主眼とすべきである。そうすることで、現代っ子の毛筆書写離れがかなり改善できると考えている⁽¹¹⁾。



(1年生の書)



(3年生の書)



(5年生の書)

今後の小学校・中学校・高等学校における書写・書道⁽¹²⁾教育には、先ず何よりもこのような児童生徒の発達段階を理解し、幅を持たせた柔軟な発想による指導と評価が重要になる。特に小学校のスタート時期の書線には、前述のように木簡的な線が散見できしており、そのことを教師は理解した上で、一步一步次の目標を設定して行ってほしい⁽¹³⁾。

とは言え、これら指導過程の見直しは、一教師の個人レベルの考えや、教材研究をすれば解決できるものではないことは十分に承知している。指導要領の見直し、それに続く教科書編集という手順も踏まなければならない。しかし、この歩みを始めていくことで、子どもたちは本来「書」が何にもとらわれることなく生まれてきたこと、自由奔放な筆の世界も存在することを知り、学ぶ喜びを掴むことができることだけは、教師は常の意識として持つておくべきであろう。

次に、木簡の現代的アート性について論じる。

木簡に見られる原初的な筆使いは、はたして「書」作品として、生かすことのできない過去のものに過ぎないのだろうか。そのことをまず考えてみたい。

前述のとおり、木簡は原初性・開放性に溢れている。また、学生諸君のアンケートの中に見られたように、木簡よりエネルギー的な人間的パワーを十分に感じ取れる。と同時に、これを臨書するにつれ、筆使いの新発見と並行して立体感あふれる筆使いが、随所に潜んでいることにも気付かされる。素朴で大らかな書きぶりの中に極めて立体的な書線や空間処理に気付かされるのである。

こうなると、次にはこれを現代書(作品)の中に位置づけたいくなるのも自然の成りゆきであろう。時折、扁額、掛け軸、暖簾、ロゴマークなど揮毫を頼まれることがあるが、書き続けていく内にアイデアが出尽くし、行き詰まりとマンネリ化が見え始めたとき、ふと木簡の法帖を眺めるときがある。そうしている内に柔軟性とパワーあふれる木簡から、新しいヒントをもらうこともしばしばである。最終的にさまざまな書体でできあがった作品を依頼主に渡すのだが、結果的には木簡調の書体(書風)のものを選ばれるこ

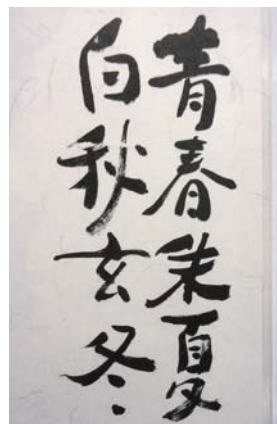
とが少なくない。これは何故だろう。過去に選ばれた書作品から木簡調のものを次に挙げる。



ポスター『大茶会』



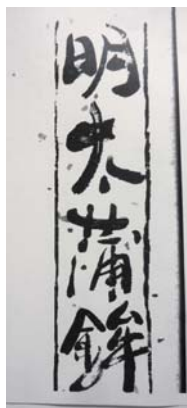
のぼり旗『伊都祭』



和風料亭マット『青春…』



蒲鉾各種ラベル



蒲鉾セット箱書き



一臣・ハノイ展ポスター

依頼主がこのような雰囲気の手紙を選ばれるのは、木簡の筆致がその原初性にも関わらず、どこかに現代人の心に響くアート性を秘めているのだろうか。古くて新しい、芭蕉の言う「不易流行」に通じるものを、ここにも見る思いがする。古代人の息吹を今も伝える「木簡」の文字群にモダン性を見ているのである。

(4) 木簡を臨書する場合の立ち位置（二つの臨書態度を例に）

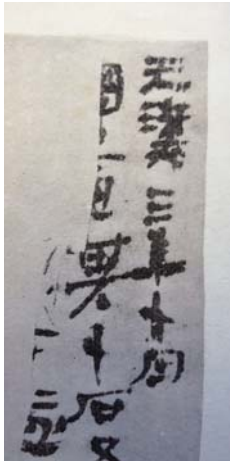
木簡の臨書作品は日本の書壇・書人団（会）・書サークルなどの展覧会において、ややマイナーな扱いをされてきた。書の歴史的名品（いわゆる書道史上の「古典」）については、時にさまざまな編集スタイルで、解説や臨書法を紹介したテキスト本が出版されるが、木簡を真正面から取り上げたテキストは未だに少ない。

とは言え、一部のグループや書家の中には、木簡の書道史的な価値を十分に理解し、臨書集・研究書の出版に努力されている。私はそれらのグループの臨書態度に、大きく2つの流れ（立ち位置）があることを感じている。それは、臨書を行う際、次のような「遅筆形臨的態度」と「速筆意臨的態度」の2つの姿勢が見られることである。

- ①遅筆形臨的態度・・・墨の濃さは普通で運筆速度は緩やか。あくまでも木簡の外観を忠実に臨書する姿勢と言える。したがって、木簡の造形性を学ぶ上で役立つものと思われる。

②速筆意臨的態度・・・墨は濃墨で運筆速度は速い。あくまでも木簡の中に潜む人間的な部分を引き出すことを主眼とした臨書態度と言える。したがって、木簡の造形性よりも線の立体感に重きを置く。

今それらを私自身の追体験（臨書）を通し述べることにする（臨書部分は、発掘された木簡中でも最も古いとされる前漢期（紀元前 100 年頃）の年号である「天漢」の銘が入っている）。



天漢三年・木簡



普通墨を使用



濃墨を使用



なお、次に挙げているのは、かつて私が個展を開いた折りに、木簡の臨書を大作したものである。近所の大工さんに頼み杉の薄板を作ってもらい、それを木簡片に見立て臨書した（縦 235 cm×横 50 cm）。墨は超濃墨を使用したのは、板に普通墨で書くと、にじみができるからだ。

このように、木簡の臨書法についても、学習者の立ち位置により違った結果が表れる。もちろん、いずれが正しいということはない。後世の書学者は、この両者の学び方の長所を採り入れつつ、新たな創作へ向け、自ら開拓していく気構えを持つべきである。なお、ここで木簡期の墨の種類についても触れておきたい。

当時（漢時代）、はたして墨がどのようにして作られ保存ができたのだろうか。これについては、近年の発掘でかなりの部分まで分かってきた。木片をもやしたときに出る煤を膠質の接着性のものに混ぜ、丸球状（炭団のように）にしており、基本的には今日の製法と変わらない。ところが私の見た限りでは、どうもそればかりではないような気がする。ロンドンで実物との対面から数十年が過ぎ、中国・西安の博物館でも木簡を見学することが可能になったので、早速出かけていき注視した折、展示木簡の一部ではあるが、文字部分にわずかな照りと盛り上がりがあるような気がした。あるいは、当時板切れ（竹切れ）に墨を乗せた時のにじみを避けるために、普通の濃さ以上の濃い墨を使

用したのではないだろうか。例えば、エナメル質に近い黒漆も想定してもよいのではないかと考える。今後の新たな発見と研究を待つ次第である。

3 結論

今日の書道界において、一見忘れられがちな「木簡」は、もっと評価されるべきである。その理由は次の4点である。

①木簡には、現在我々が目にしている文字（漢字）の中に、古代人が筆を使って初めて書き始めた頃の息吹が表れているとともに、当時の人々の文字や書線に対する気遣いが素直な姿で表われている。やがて、これが時代の流れとともに、様々に移り変わっていくが、その原点としての木簡の存在価値は、今もって大きいものがある。

②「木簡」は、後に見られるようになる書家・書道家といった人たちの手になるものではない。とは言え、ここに遺された文字群には、確かに観る者の琴線を揺さぶる何かがある。これは、書線の中に潜む「人間性」と言えようか。そして、これこそ「書」を芸術ならしめる原点と考える。

心を不在にしてテクニックばかりを競う一部の書家は、書道史上でも異彩を放つ木簡の書線に潜む人間的エネルギーを、どう観るであろうか。

③「木簡」は、シンプルな書体・書風でありながら、格調（香り）高い古典と言える。混沌として複雑な現代世相にあって、凜とした一服の清涼剤的位置も保っている。難しい説明を要するものでもない単純明快な運筆は、そのまま作者の生き方そのものであり、書道史上貴重な存在と言える。今後も尚、木簡の底辺に流れる銜いのない書的美しさは、さらに光を増し放っていくに違いない。そこに、歴史的に最も古い筆字・「木簡」のシンプルさとモダンさが同居しているからである。

④日本において、「木簡」臨書を重要視している書家は少ない。中国においても、隸書作品の中に、それらしき筆法を採り入れている書家が居なくもないが、多くはその底辺に潜むエネルギーに視点を当てていないようだ。

もちろん、原初的な書のスタイルを保っている木簡の臨書法は一つにとらわれることはない。あくまでも書学者個々人が、自分の心象風景を通して木簡を現代的に表現すればよい。そういった柔軟性をもった臨書態度こそ、「木簡」自身の持つ懐の広さは待ち望んでいる。今後は、木簡臨書の意義をさらに深く理解し、そこに秘められた古代人の息吹を体感するほかはなかるう。

おわりに

「書道」という語彙（世界）が苦手である。10歳から今日まで、私はこの世界に足を着けてきたのだが、年を追う毎に「自分は書道しているのだろうか？」の意を強くしている。「道」を極めるにはほど遠い私にとっては、むしろ「書・アート」の方がすっきりと説明がつく。

このような自分が、書歴60年を越えた今も、「木簡」を手放せないでいる。何かに行

き詰まったとき、アイデアが枯渇したとき、自分の書線に張りがなくなりはじめたとき、この「木簡」はアドバイスを送ってくれる。なぜだろう？ そこに木簡の持つ素朴かつ包容力ある姿が、書本来の在り方を求めるように問い続けてくれているからに違いない。テクニックのみに溺れかけている自分に、書線の背後に在る人間性を蘇らせてくれるのだろう。「木簡」に潜む、強さ・温かさ、そして自由へと向かう開放性が、ゆとりと緊張感とのバランスを欠き易いこの現代社会にあって、我々を心底から揺さぶり続け、人間性の回復を享受させてくれている。

註

- (1) 書道史上、木簡は正式には簡牘と呼ぶべきである。この時代の毛筆書は（紙が発明される前後ということもあり）「簡」すなわち竹片に書かれたものと、「牘」すなわち木片に書かれたものが存在するからだ。また、ほぼ同時代紙に書いた文字や帛片に記録されたものもあり、これを一般に「残紙」と呼んでいる。時代的にこれらの書体に類似点が見られることから、一般的には、これをひとまとめに編集している研究書や臨書本が多い。平城宮や太宰府で出土した木簡は、シルクロードで発掘される漢時代を中心にした木簡と異なり、時代も下がるため、書的な価値はさほど評価されず、もっぱら考古学的資料に留まっている。
- (2) 木簡の出土は、圧倒的にシルクロードの中継オアシス都市に集中している。時代的には前漢から新・後漢時代を経て三国・晋時代までも見られる。やがて紙が手に入り易い時代が到来するとともに、木簡の時代も次第に終わっていく。
- (3) この当時は、後の時代に現れるような名筆家・能筆家などが存在せず、各地方に居た書記官が担当していたにすぎない。
- (4) 文化大革命以後、ようやく中国が本腰を入れてシルクロードの文物に光を当て始め、発掘が始まるのだが、当時は我々一般人の中国での自由行動（旅行）はできなかった。
- (5) 大英博物館に木簡が収蔵されているのは、20世紀初頭シルクロードの遺跡群を調査したイギリスの探検家・スタイン（ハンガリー出身・英国に帰化）がこの地を発掘した際、大量な遺物を持ち帰ったことによる。したがって、私がここで見た木簡はその中の11枚に過ぎない。
- (6) 現在の博物館の陳列はどうなっているのか分からない。1978年当時は、この2点で古代中国の文字文化を説明しているにすぎなかった。尚、「甲骨文」は「木簡」よりもさらに時代は遡り、紀元前1500年頃・殷時代のもので、今のところ歴史上では最も古い文字とされている。筆の発明以前であり、動物の骨にナイフのようなもので刻した文字群である。
- (7) 篆書は、大きく大篆と小篆という書体に分かれる。これらは主に西周（前800年頃）から秦（前200年頃）までに見られる。現在では、篆刻家などを中心に印鑑などを彫る際にこの書体を使っている。複雑だが文様のデザイン性に富む。
- (8) 篆書の筆画を整理・省略し、曲線を直線的に変え実用に適するようにした書体
- (9) 純真紀要題53号、平嶋「小学校の『毛筆書写』指導に関する一考察」、P9

- (10) 純真紀要題 53 号、平嶋「小学校の『毛筆書写』指導に関する一考察」、P 5
- (11) 毎年、春になると福岡市内の先生方の要請を受け、3 年生 20 クラスほどに出向き、出前授業『習字・はじめの一步』を行っている。ここで感じることは、少なくとも 3 年生の間は、筆の通った跡の面白さに主眼を置いた体験学習を重視させて良いのでは、ということである（私の出前授業ではそのようにさせてもらっている）。
- (12) 高校での書道は、『芸術科・書道』として音楽・美術と並んで位置づけられている。なぜ、「書」のみ「道」が付いているのだろうか。これを「芸術」と位置づけるには、さらにその目的や学習（授業）の仕方を洗い直すべきであろう。
- (13) もちろん、木簡調のものだけを評価すると言うわけではない。児童の書線の表れをまずは幅広い観点から評価し励ましを与えていくべきである。

参考図書

- 安藤更生・堀江知彦編『今日の書道』二玄社、1954 年
- 飯島稲太郎編『和漢墨寶選集・第 1 巻、空海・風信帖』書芸文化院 1970 年
- 石川九楊著『書とはどういう芸術か』中公新書 1220、1994 年
- 魚住和晃著『書の十二則』NHK 出版 187、2006 年
- 上田桑鳩著『書道鑑賞入門』創元社、1966 年
- 上田桑鳩著『書の話・第一巻』教育図書研究会、1964 年
- 宇野雪村著『書・造形編』教育図書研究会、1956 年
- 江守賢治著『字と書の歴史』日本習字普及協会、1980 年
- 大澤一爽著『書を科学する』木耳社、1974 年
- 榊 莫山著『書道基礎講座 1 入門と基礎』創元社、1983 年
- 白川 静著『漢字』岩波書店 747、1970 年
- 田中塊堂著『日本書道史』佛教大学出版部、1967 年
- 手島右卿著『右卿唐詩帖』五禾書房、1967 年
- 二瀬西恵編『書作のための木簡字典』木耳社、2004 年
- 野口白汀編『毎日書道講座 3・篆書 隸書』毎日新聞社、1989 年
- 春名好重編『書道芸術・Ⅲ』中教出版株式会社、1996 年
- 春名好重編『書道基本用語詞典』中教出版株式会社、1991 年
- 比田井天来著『学書筌蹄・拔萃』書學院出版部、1971 年
- 藤原鶴来著『新書道字典』二玄社、1995 年
- 森田子龍編『木簡集英・上巻下巻』1963 年、1967 年
- 源川 進著『書の基本資料・3』中教出版株式会社、1992 年
- 宮坂和雄著『墨の話』木耳社、1979 年
- 甘肅省博物館編『漢簡隸書選』甘肅省博物館蔵簡、1994 年
- 飛雲会編『簡牘精萃』飛雲会、1971 年